



わが手に雨を

グレッグ・ルツカ 佐々田雅子 [訳]

A FISTFUL OF RAIN

A FISTFUL OF RAIN
BY GREG RUCKA
COPYRIGHT © 2003 BY GREG RUCKA
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEI SHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH THE BANTAM PUBLISHING GROUP,
A DIVISION OF RANDOM HOUSE, INC.
THROUGH JAPAN UNI AGENCY, INC., TOKYO.
PRINTED IN JAPAN

わが^て手に^{あめ}雨を

二〇〇四年九月三十日第一刷

著者 グレグ・ルツカ

訳者 佐々田雅子

発行者 庄野音比古

発行所 株式会社文藝春秋

〒一〇二一八〇〇八

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話 〇三―三二六五―一一一一

印刷所 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

万一、乱丁落丁があれば送料小社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-16-323360-1

わたしのエージェントで、代弁者で、親友である
デイヴィッド・ヘイル・スミスへ

心の中には窓があつてドアがある
光を入れてもいい

風が吹くのを感じてもいい
失うものもなく

得るものもないときは

雨のしずくを手を受けよう

——ウォーレン・ジヴォン

Jacket Design: Kentaro Ishizaki
Jacket Photo: Tom Bean/Getty Images

わが手に雨を

主な登場人物

ミム・ブラッカ	語り手	ロックバンド《テイルフック》のギタリスト
トミー	ミムの父	刑務所から出所したばかり
ジョーン・ベッカーマン	ミムの養母	音楽教師
ステイヴン・ベッカーマン	ミムの養父	ミュージシャン 癌で死亡
マイケル・ブラッカ	ミムの兄	ドラッグ・ディーラー
ヴァネッサ	《テイルフック》のヴォーカリスト兼ベーシスト	
クリック	同ドラマー	
グレアム・ハヴァーズ	同マネージャー	
オリヴァー・クレイ	同サポート・ギタリスト	
フレッド・チャペル	弁護士	
リチャード・バーシエット	セキュリティ会社社長	
トレイシー・ホフマン	ポートランド市警刑事	
マーカス	同右	
ワグナー	同右	

プロローグ

これはあたしには絶対に書けない歌だ。

今しがたまで雨が降っていた。血まめのような雲が分かれて、目の覚めるような青空がのぞいている。雨水は今、通りに水溜まりをつくったり、刈ったばかりの芝生の葉にしずくとなつてしがみついたりしている。それが突然の日の光を浴びて、むきだしの目を射る輝きを放っている。午後も遅くなり、寒さがつのってくるが、女の子と母親を室内に追いやるほどではない。二人はドライヴウェイで細工に励んでいる。油の染みが散らばるコンクリートに新聞紙をひろげて。そこに、果物ナイフ二本と、下絵を描くの用いる黒のフェルトペンが一本。カボチャはすでに十一歳の女の子の手で不完全なロボトミーを施され、ジグザグの切れこみを入れられている。抜かれた種とわたがうずたかく積まれている。

カボチャのわたしは両手をべとべとし、爪の下深くにまで食いこんでいる。女の子は完璧な顔をつくろうと、むきになって作業を続ける。それが完成して、中で蠟燭が燃えるイメージを思い浮かべながら。すべてが仕上がったときにどんな姿になるかはわかっている。だが、意中のデザインをなかなか実現してくれない自分の両手にいらだつ。女の子は急いで、たびたびミスを犯す。

母親が励まし、注意する。自分が何をしているか、よく見なさい。ナイフをなくさないでよ。あまり強く押しちや駄目。やりなおしはきかないのだから、間違わないようにね。母親は喋りながら、カボチャの種をより分けて浅いボウルに入れる。あとで炒って、塩を振りかければ、おいしいスナックになるのよ、と娘にいう。

玄関のドアが開く。ジャケットの袖に腕を通してながら、兄が出てくる。妹と母親には目もくれず、そばを通り過ぎる。ハロウィーンには年を食いすぎたティーンエイジャー。もう仮装して喜ぶような年ごろではない。兄は家庭内にわだかまる緊張を肩や背中に背負っている。ご飯には戻りなさいよ、と母親が声をかけても、わかったというしるしに一声うめくだけだ。女の子は自分の手もとから視線を上げようもしない。歯を見せてにやにや笑う顔をきれいにくりぬこうと、ナイフで悪戦苦闘している。母親が息子のこと、息子が巻きこまれたトラブルのことを低い声でぼやくのが聞こえる。だが、子どもの日常のほかの多くのことと同じく、その繰り返しも背景の雑音でしかない。ただ聞き流すばかりだ。

女の子と母親は作業を続ける。かつては悪霊を追いはらうのに用いられたが、今ではよその家人を戸口へ呼びだすのに用いられる顔をつくっていく。

新たな音がする。ガレージのモーターのうなり。リモコンで扉がガラガラと開く。女の子は肩越しに振り向いて、トラックのハンドルを握っている父親を見る。父親は指に煙草を挟んだ手を振り、何かいうが、エンジン音に掻き消される。顔は怒気を含んでいる。運転台の父親の隣には、車内でとれる限りの距離をとって兄が座っている。兄は今、どこかに逃げだしたいということしか頭にない。妹に見られるとあわてて視線を逸らす、あふれかけた涙を隠す暇はない。

母親がジーンズに指をこすりつけながら立ち上がる。かたづけをしてドライヴウェイから引き

あげるよう娘にいつける。お父さんが帰ってきたわ。きょうはたいへんな日だったのよ。母親は娘にいう。お父さんは疲れてるわ。

お父さんは毎日がたいへんな日なのに、と女の子は思う。毎日、帰ってきたときには疲れているもの。だが、女の子はそれを口にはしない。もう馴染みになった何かを感じているからだ。それを感じる時には黙っているに限る。恐怖ほどには明瞭でない束の間の感覚。女の子はその感覚を友として認識するようになっていく。それは危険を告げてくれるからだ。女の子はカボチャを両手で抱き締め、ドライヴウェイからポーチへと運びにかかる。

車上の父親の声が聞こえる。前よりも声高になっている。女の子は緊張を緩める。父親の大声も背景の雑音の一つでしかない。今は、秋と雨とカボチャのにおいがしているが、父親がそばにいれば、自分がトラックに同乗していれば、煙草のにおいの陰でビールのにおいがすると知っている。兄がそのために放課後の居残りを課せられるような汚い言葉を使い、母親がやり返す。ドアがキーときしって開き、またバタンと閉まる音がする。兄の声もするが、長くは続かない。

女の子がカボチャをポーチに置いたとき、トラックのエンジンがうなりを上げるのが聞こえる。母親の悪態をかき消そうと叫んでいるようだ。湿ったアスファルトの上で、タイヤが激しく滑るのが聞こえる。といつても、ほんの一瞬だ。カボチャの種を入れたステンレスのボウルがタイヤにかすめられ、カタカタと転がるのが聞こえる。そして、母親の声がやむのが聞こえる。まるで声が体から引き抜かれ、傍らに投げ捨てられたようだ。

エンジンが沈黙する。

女の子はふわふわ、くらくらした感覚に見舞われ、目がくらむ。何が起きたか見ようと振り向くことも忘れていく。自分がガレージの入り口のほうに走っているのか、歩いているのか、漂っ

ているのかもわからない。父親がトラックの運転台から降りてくる物音も聞こえない。兄が自分の肩を押さえ、よそを向かせようとしながら、怒鳴りつける声も聞こえない。

とりわけ、母親が立てる物音が何も聞こえない。母親は車輪と地面の間に挟まれている。

女の子はドライヴウェイの端から端までを見わたす。排水溝に雨水と混じって血が流れているが目に入る。

新たに積み重なった雲の陰に日の光が消える。

再び雨が降り始める。

第一章

シドニー発の便がロサンジェルズに着陸したとき、出迎えてくれたのは二日酔いだった。当然といえば当然だった。レッドカーペットクラブ（空港のラウンジ）で飲みはじめて、日付変更線を越えたあとまで飲みつづけていたのだから。

飛行機を降りたとき、クルーやほかの乗客の刺すような視線で思い知らされた。あたしはけっして模範的な乗客ではなく、何か酈ひんしゆく感かんを買うような真似をしたらしい。でも、誰も何もいわなかったし、あたしも聞いてみるつもりはなかった。見る限りでは、服にゲロがこびりついてはいなかったし、まだパンツを下ろしてもいなかったからだ。だったら、どんな真似をしたにしても、そんなにひどくはないはずだ。

そう、あたしがオーストラリアに置き去りにしてきたのよりひどいことなどあるはずがなかった。

税関の通過待ちの間、左右のこめかみを万力で締めつけられるような気がしてきた。無理もなかった。まだほとんど酔いからさめていなかったのだから。世界がぼんやり、ふらふらしていた。列から引きずりだされたのは、そのせいだったのかもしれない。いや、そのせいではなかったのかもしれない。でも、あたしは文句をいわなかった。うちのバンドのマネージャー、グレアム・ハヴァーズから指示されていたとおり、素直に従った。セレブのステータスにはおいしいことも

伴うが、足を引つ張ろうと鵜の目鷹の目になっている人間につきまとわれるのも避けられない。ミュージシャン——もつと正確にいうと「ポップ・ミュージック」をやるミュージシャン——は、安息日再臨派（禁欲的なキリスト教の一派）のライフスタイルで知られているわけではないのだし。

検査は徹底的だった。検査官たちも徹底的だった。彼らは禁制品、とくにドラッグを持っていないか聞いてきた。あたしを引っかけようと、何度も繰り返し聞いてきた。ポケットを裏返しにさせた。ジャケットを振ってみた。ポデイチエックをした。煙草の箱を開けさせた。貴重なニコチンの一本一本をチェックして、煙草の葉以外のものは詰まっていなくて確かめた。

彼らがバッグを調べ終わるのを待つて、あたしはシャツを脱ごうとした。すると、監督していた検査官がそれを止めた。「何をしてるんです？」

「これがお望みなんじゃない？」あたしは聞き返した。早口で不明瞭だったのが気になった。「だから、これが、ほら、お望みだったんじゃないの？」

検査官の目が冷たくなった。「違います」

「あら」あたしはシャツをたくしこんだ。「それじゃ、あたしの勘違い。そうよね？ 勘違いよね？」

「そうじゃないんですか」

あたしが持ちものをまとめると、検査官は狭い取調室の出口のドアを開けて送りだしてくれた。今度はよろめかずにさっさと歩けたのが自分でも不思議だった。

「たまにはやるのよね」検査官にいった。

「え、何です？」

「勘違い」あたしはいった。「しないわけじゃないの」

乗り継ぎの前にトイレに駆けこまずにはいられなかった。痛みを感じるまで吐いた。トイレの外でカメラマンが張っていた——税関をかくぐったあたしを見かけたに違いない——あたしが姿をあらわすと、大声で名前を呼んだ。

「ミム！ ブラッカ！ なにか売れるネタくださいよ」

モータードライブのうなりを聞く前に、あたしは両手をあげた。片手で顔を隠し、もう一方の手で思い知らせてやった。あたしが彼とそのミノルタをどう思っているかを。それから、ほかの旅行客の人垣をかきわけて進んだ。ちよつと愛想がなかったが、カメラマンとはそれでさよならした。少し気分がよくなった。フィルムを現像してみても、映っているのはあたしの左手の指先と右手の中指のたこのクローズアップだけだ。

フライトはサンフランシスコの霧で遅れていた。おぼえていられないほどよくあることだったが、そのたびに首をかしげざるをえなかった。あたしがロサンゼルスとポートランドの間を飛ばうとすると、なぜ、サンフランシスコの霧が必ず因子として入ってくるのだろうか？

霧やら保安の問題やらで、搭乗するまで六時間、地上に釘付けになっていた。あたしはゲートに近い喫煙所へ煙草を吸いにいった。石のベンチと、灰があふれた灰皿に囲まれた屋外の一角へ。ギターの一本でもあればと思わずにはいられなかった。ツアーに持っていた五本のうちの一本でも。四本は別の便で送り返していた。テレキャスター（米フェンダー社製のギター）は手荷物にしていた。結局、待ち時間のほとんどを居眠りでつぶすことになった。酔ってこっくりこっくりしているうちに、何か大事なことがあるのに寝過ごしたかもしれないと思つて、はつと頭を上げる。そんなふ

うに何度も目を覚ましながら。

それでも間違ひなく搭乗することができた。無事にシートに落ちつくと、再び眠りに落ちた——もつと正確にいうと、ぶつぶつべれた。安全についての長つたらしい説明は聞き逃したが、そのほうがよかったのかもしれない。この前のフライトでは、その最中にひどく悲觀的になつたような記憶があつたからだ。といって、あたしに安全に関する知識が要らないわけではなさそうだった。ここ何年か、しょっちゅう飛行機に乗っているせいで、上空のリサイクルされた空気が原因の鼻血に悩まされるようになっていた。

雨のポートルランド着陸には、ショックとバウンドとスライドがつきものだ。それで、あたしも目が覚めた。口の中が乾いて、頭痛は前よりひどくなつていた。やつと素面しらふになつたが、素面がよいものなのかどうか、いまだに確信が持てなかつた。

ターミナルには人気がなかつた。空港と病院の空いた時間すに共通する押し殺したような静けさが満ちていた。あたしはまたトイレに寄つて、水飲み器の水でうがいした。コンコースを歩くころには、独りで問題なく歩けるようになっていた。検問所の近くのキオスクに発光ダイオードの表示板があつた。それが、バラの町ローズシティ、オレゴン州ポートルランドによるこそ、と歓迎してくれた。ついでに、十月二十二日、月曜日、太平洋標準時で午前一時十六分と教えてくれた。

それは大事なことのうに思えたが、なぜ大事なのかを思いだす前に、目がよそに釘付けになつた。もう閉まつた新聞売り場の錠のかかつた扉の後ろに。

《ピープル》と《エンタテインメント・ウィークリー》の山の間に《ローリング・ストーン》の最新号が顔を出していた。よく撮れた表紙の写真、いかにも《ストーン》らしいくだらない読みもの、鮮やかな色、大きなロゴ。二十いくつと思われる三人が、髪や布を風になぶられながら、